

# 沼津市若山牧水記念館

第72号 令和6年3月5日 編集・発行 公益社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424  
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 <http://web.thn.jp/bokusui/>



## 椎の木のしげみが下のそば路に ちりこぼれたる山ざくら花 牧水

牧水は、第十四歌集『山桜の歌』（大正十二年新潮社刊）の「山ざくら」と題する二十三首のうち十八首について、『自歌自釈 その四』（若山牧水全集第七巻 増進会出版社）の「山桜の花」の項で次のように解説をしている。

私は山桜の花を好む。すべての花のうち、最もこれを愛する。ついでに言っておくが、都会住居の人などにはこの山ざくらの花を知らずにいる人があるかも知れぬ。東京などに咲くのは多く吉野とか染井とかいう種類だそうで本統の山ざくらをば殆んど見受けない。この桜は花よりも葉の方が先に萌える。その葉の色は極めて潤沢な茜じゆんたくを含んで居る。そしてその葉のほぐれようとするところにほんの一夜か一日で咲き開く花の色は近寄って見れば先ず殆んど純白だが、少し遠のいて眺めるとその純白の中に何とも言えぬ清らかな淡紅色を含んで居る。花のさかりは極めて短く、ほんの二日か三日かで褪あすることなくして散ってしまう。散り初めたとすればそれこそ一寸の間をおかないではらはらはらと次ぎから次ぎに散り次いで程な

城山の北麓に当る峡谷で、温泉がある。私はこの二三年來、その花の咲くころとなれば毎年欠かさずそこに其処へ出かけてゆく。

牧水は、大正九年八月十五日に一家を挙げて沼津に移住した。移住した当初は東京での生活の疲労や移住するための苦勞などがあつたが、二三月も経つと沼津での生活にも慣れて、旅にも出るようになった。

大正十一年正月には、伊豆土肥温泉に十日ほど滞在して四十首近くの短歌を発表している。その後、三月二十八日から四月二十日まで、湯ヶ島温泉湯本館に滞在し、多くの短歌を作つた。

掲出の短歌は、その中の一首で『山桜の歌』の「山ざくら」の中の一詩である。「山ざくら」の短歌を四首紹介する。

うすべにに葉はいちはやく萌えいでて咲かむとすなり山桜花

うらうらと照れる光にけぶりあひて咲きしづもれる山ざくら花

瀬瀨走るやまめうぐひのうろくづの美しき春の山ざくら花

山ざくら散りしところ真白くぞ小石かたまれる岩のくぼみに

く若葉のしめやかな木となつてしまふのである。その山桜の木が多いところはこの付近では先ず伊豆の湯ヶ島である。天

# 牧水、後期三〇首 奥田亡羊

令和五年十月一日に開催された「沼津牧水祭・短歌大会」で、「ゾーンに入る牧水」という題で講演をさせていただきました。

「ゾーン」という言葉を最近、よく耳にします。心理学の用語で、「高い集中力を保ちながら、緊張状態とリラックス状態が適度なバランスを保っている状態」を指すようです。

この状態に入るとスポーツ選手が、ボールが止まって見えたり、相手の動きがスローモーションのように見えたりするといえます。ボクシングの井上尚弥が試合後にKOPランチの軌跡が見えたと発言したのが話題になりました。これも「ゾーン」の一例かと思えます。

さて、若山牧水にも「ゾーン」に入り込む才質があったのではないかと、そして、それが牧水の歌の魅力の根源にあるのではないかと、これが講演のテーマでした。

牧水の「ゾーン」は、彼が書いた文章を読むとわかりやすいと思います。たとえば「山上湖へ」（『比叡と熊野』所収 大正八年春陽堂刊）という紀行文です。大正七年（一九一八）の十一月、牧水が群馬県の榛名山に登ったときの体験を書いたもので、岩波文庫の『みなかみ紀行

で読むことができます。

無理をして山へ山へと念じて来たのも実はこの鳥の声が聞きたいからばかりであった。私は山深い所に生れて幼くからこの深山の鳥のさまざまな声に親しんで来た。

（略）日もささぬ木立の深いなかで眼を瞑ってそれに耳を傾けていると、久しく忘れていた「自分」というものに思わずも邂逅したような哀しさ楽しさを沁々と身に覚えたのであった。（略）踏みしむる路は微かに湿りを帯び、眼上の峰、見下す溪間は萌え立つた若葉に渦巻き、種々様々の名も知らぬ鳥の諸声は其処から此処からと溢れ出て私の身を刺して来るのである。（略）何ともいえない静寂と光明とがその声に聴き入っている私の身邊をしつとりと包んで来た。山はただその鳥の声のためにかすかに呼吸つき、ひそまり返っている四辺の松の木はただそのためにほのかに光を放っているようにのみ私には思われ て来た。ああ、鳥は啼く、鳥は啼く。（略）私の心が空虚になる時、私の心が濁く時、彼らは啼いた。私の心がさびしい時、あこ



「山上湖へ」が収録されている『比叡と熊野』

がる時、彼らは啼いた。私の心が何かを求めて動く時、疲れて其処に横わる時、彼らは私と同じい心に於て私の心にそのまことの声を投げてくれた。

いかがでしょうか。「何ともいえない静寂と光明」が「私の身邊をしつとりと包んで来た」。大好きな鳥の声にひたっている牧水の恍惚が伝わってきます。心が空虚になるとき、乾くとき、さびしいとき、あくがるととき、牧水の心そのままに啼く鳥の声があります。心が求めるから、鳥が啼くのか、鳥が啼くから心が求めるのか、牧水の心は鳥の啼き声とすつかり同化しているようです。これが「ゾーン」に入っている時の牧水の心理状態です。

鳥に限らず、酒にしても、渓谷にしても、富士山にしても同じです。牧水はつねに愛するものを求め、それに出会うと、感覚を解き放って陶酔し、対象と一体化します。では、そのような感性を通して牧水はどんな歌をうたったので



しようか。

昨年(令和五年)に、沼津牧水会が『牧水鳥』という本を出版しました。牧水の鳥の歌だけを集めたアンソロジーです。牧水が生涯に詠んだ歌は約八八〇〇首、そのうち鳥を詠んだ歌は八四九首あるそうです。およそ十パーセントの歌に鳥がうたわれている計算になります。どれだけ牧水が鳥を愛していたかがわかりますね。この本ではカモメ、ヒバリ、ホトトギスなど、鳥ごとに歌がまとめられています。牧水を知る貴重な資料であるとともに、鳥の歌を作るときの参考書としても役立つ一冊です。この本から牧水の鳥の歌をいくつか引いてみましょう。

わがいのち空にみちゆき傾きぬあなはる  
かなり遠ほととぎす 『独り歌へる』  
啼く声のやがてはわれの声かともおもは  
るる声に筒鳥は啼く 『くろ土』

「わがいのち」の歌は鳥をうたった牧水の絶唱です。自分の命が空に満ちて傾く。ダイナミックですね。そしてその命が、遙かに飛んでゆくホトトギスを捉えています。まるで心がホトトギスと一体化しているようです。

二首目の「啼く声の」は、ツツドリ声を聞くうちに、それが自分の声と思われてくるとうたっています。先ほどみた「山上湖へ」の文章と同じです。この歌のモチーフも鳥との一体化うたう対象を客体化したアララギの写生との違いを見ることができそうです。

手にとらばわが手にをりて啼きもせむそ  
この小鳥を手にも取らうよ 『くろ土』  
水色の羽根をちひさくひろげたりと見れ  
ば糞は落ちはなれたり 『くろ土』

この二首からは牧水の鳥への愛情を感じ取ることが出来ます。「手にとらば」の歌は鳥との距離の近さが印象的です。実際にすぐそばで鳥を眺めていたのでしょうか。でも、心理的にはもつと近い。気持ちのなかでは、もう鳥を手にとって啼き声を聞いているかのようです。

「水色の羽根を」の歌は、牧水がまじまじと鳥を観察している様子が伝わってきます。第四句の「と見れば糞は」がポイントです。羽を広げたと見ていたら、あろうことか糞を落としました。その小さな驚きが第四句の「と」の間合い、呼吸に込められているのではないのでしょうか。

秋百舌鳥の高啼くこゑは軒にひびき部屋  
に響きて居るにをられぬ 『山桜の歌』  
浅川のせせらぎ澄みて流れたりうららけ  
きかも鶯の声 『黒松』

鳥の声と牧水の心がびつたりと重なりあった二首です。軒端近くに鳴く声を聞いて、牧水はいてもたってもいらなくなるんですね。啼いているモズを見たい。そして牧水はモズを、秋を感じる鳥だと言います。モズを見たいと願う心は、そのまま秋の世界へとあくがれ出る心でもあったのではないのでしょうか。

一方、「浅川の」の歌は早春の場面。うららかに啼くウグイスの音が春の景色を開くように、牧水の心にもまた春を開いています。

「ゾーン」という言葉にあまり引きずられる必要はないのですが、鳥への牧水の愛情や没入感が、世界との深い交感を生み出しているように私には感じられるのです。

講演を機会に若山牧水の後期の名歌を選んでみました。以下、第八歌集『砂丘』以後の歌から私が選んだ三〇首です。ほとんどは若波文庫の若山喜志子編、伊藤一彦編の『若山牧水歌集』と重なりますが、二、三首、これまでにあまり引かれなかった歌を見つけることができました。

① 今日もしも峰越しの風の強ければうす雲  
も鷹も光り流るる 『砂丘』



左から『溪谷集』『砂丘』『朝の歌』『くろ土』『山桜の歌』『黒松』

これも鳥をうたっていますね。「峰越しの風」は尾根を越えて吹く風のことです。強い風に流されながら、雲とともに鷹は命の光を発しています。旅人である自分に重ねているのでしょうか。

② 昼深み庭は光りつ吾子ひとり真裸体にして鶏追ひ遊ぶ  
『砂丘』

子供が裸で鶏を追って遊んでいて、庭は潤むように光をたたえています。どうでしょう、この恍惚と陶酔感は、まさに「ゾーン」に入り込んでいる感じがします。

③ やと握るその手この手のいづれみな大きなからぬなき青森人よ  
『朝の歌』

④ ひつそりと馬乗り入るる津軽野の五所川原町は雪小止みせり  
『朝の歌』  
⑤ 白雪の何処にひそみほろほと鳴き出づる藁津軽野の春  
『朝の歌』

右の三首は青森を旅したときの作品です。やあ！と握る青森人の大きな手、雪が小止みになったときに姿を見せた五所川原の町、津軽野の春を告げる雪間の蛙。一瞬にして対象を掴み取る出会いが新鮮です。そして、ああ、これに会いたかったんだという牧水の喜びの声が聞こえてくるようです。

⑥ 石越ゆる水のまろみを眺めつつこころかなしも秋の溪間に  
『溪谷集』

「石越ゆる水のまろみ」、この表現にも技法としての写生を超えたものを感じます。単純に言えば、溪川への愛があるということです。

⑦ 一人乗り二人乗りたるとりどりに筏は過ぎぬ秋光る瀬を  
『溪谷集』

⑧ かの筏父子なるらし老若のうたひてくだる長さその瀬を  
『溪谷集』

秋の瀬のきらめきを下つてゆく筏。そこには唄いながら筏をあやつる親子らしい二人もいます。牧水の眼差しは深く、旅で出会った名もなき人々の人生を、慈しみをこめて見えています。

⑨ 沖辺より昇りいまだもたたぬ月かがよはずしてわれを照らせり  
『溪谷集』

「かがよはずして」が歌の世界を決めています。「かがよふ」はきらきらと揺れ動くこと、光りきらめくことと辞書にあります。まだ耀よわぬ月がじつと自分を見つめてくるようです。

⑩ 六歳の兄四歳の妹のならび寝てかたりあふ聞けば癒えて後のこと  
『くろ土』

この歌もいい歌ですね。牧水が愛情のこもった眼差しで眺めているのは、子どもたちの願いごとや希望そのものです。

⑪ 散り浮きて湯の面に黄なる新落葉なにぞと見れば栗の葉らしき  
『くろ土』

温泉につかりながら、湯の面に浮かぶ新しい落葉を見つけました。何の葉だろうと思つてみたら栗の葉だった。何ということのない内容ですが、やはり牧水の栗の葉への親しみ、愛を感じます。

⑫ うららかに冬日晴れるてけふ越ゆる路は水なき溪に沿ひたり  
『くろ土』

冬の乾いた溪谷を旅する一首です。異界へと通じてゆくような明るさと静けさですが、不思議にこの歌には潤いがあります。

⑬ 霜解くるひなたの路次をほがらかに呼びつつ来る鮒を買はうよ  
『くろ土』

霜解けの路地を鮒売りが来ます。その呼び声

に牧水も「おう、買うよ」と応えようとしている。春に呼び掛けられて、春に応えるような、そんなおおらかさです。

⑭ みじか夜のいつしか更けて此処こゝひとつあけたる窓に風の寄るなり 『くろ土』

こちらは夏の夜。窓に吹く風の何という瑞々しさでしょう。短夜といひながら、移ろいゆく時間を静かに味わっています。

⑮ 立ちどまるわが身真白し見かへれば降る雪暗く山をつつみ降る 『くろ土』

自分も山も、雪が包み込むように降っています。雪を通して山とつながっているんですね。字余りの結句にこの歌の深みがあるようです。

⑯ 朝づく日峰をはなれつわが歩む溪間のあを葉ひとつひとつ光る 『くろ土』

「朝づく日」は朝方の太陽です。その日が峰を離れたとたん、溪間の青葉がいつせいに輝きわたった。「ひとつひとつ」に世界への感動と愛情がこもっています。

⑰ 熊笹のさゆらぎたちておほきなる雲は過ぎゆくわれの真うへを 『くろ土』

笹鳴りの音がして、笹原を雲の影が過る。雲は旅人としての自分でもあるのでしょうか。空をわたる雲と笹原をゆく自分に、大きな風が吹い

ています。

⑱ 海鳥の風にさからふ一ならび一羽くづれてみなくづれたり 『山桜の歌』

この歌を最初に評価して取り上げたのは佐木幸綱です。「歌は翼」という評論で幸綱は牧水の歌を次のように語っています。

牧水にとつて、歌とは翼であつたのだ。そして、牧水自身も、できれば鳥と化したかつたにちがいない。歌をつくること、旅をすること、酒を飲むこと、牧水の生涯はこの三つだけにひたすらのめり込んで生きた生涯であつた、と極言してもさして誤ってはいない。この三つの脱日常の方法を実践することによって、いつの日か彼は本当の鳥になるつもりだつたのではないか。

すぐれた牧水論です。この「脱日常」を対象への愛と没入と言ひ変えることはできないか、これが私の講演のテーマでした。この歌にも牧水の鳥たちを慈しむ眼差しがあるのではないでしょうか。

⑲ たそがれの小暗き闇に時雨降り築やなにしらじら落つる鮎おほし 『山桜の歌』

この歌はあまり引かれることはありませんが、牧水後期の名歌の一つであると思います。意味らしい意味はありません。でも、繰り返し

読むと心に沁みてきます。生の深奥しんおうに触れてくるような幻想性があります。

⑳ 瀬瀨せせ走るやまめうぐひのうろくづの美しき春の山ざくら花 『山桜の歌』

連作「山ざくら」の一首です。「うろくづ」は鱗のことですが、溪流を泳ぐヤマメの閃きと解してよいでしょう。同じ連作の「うらうらと照れる光にけぶりあひて咲きしづもれる山ざくら花」も秀歌です。「瀬瀨走る」の方を選んだのは、よりこの歌に牧水の陶酔感と恍惚感があるからです。

㉑ 照り澄める春くれがたの日のいろにひたりて立てるとりどりの木よ 『山桜の歌』

春の夕陽のなかに立つ樹々。「照り澄める」光の中に「ひたりて」というのがポイントです。牧水もまた樹々と、静謐せいつな時間のなかに佇たんでいるように感じられます。

㉒ 麦畑むぎはたのひとつと風かぜの吹きたてば夕日は乱るその穂より穂に 『山桜の歌』

夕光を穂に移しながら麦が揺らぎ乱れる美しさ。「夕日は乱るその穂より穂に」は風と光と麦が一体化した、なんとも繊細な情景です。

㉓ 寄り来りうすれて消ゆる水無月の雲たえまなし富士の山辺に 『山桜の歌』

数多い富士山の歌からはこの歌を選びました。富士山に雲や煙が流れる歌はよくあると思いますが、「寄り来りうすれて消ゆる」という表現は牧水ならではです。雲までもが富士山を慕って集まって来るのでしょうか。「水無月」という言葉とは逆に、夏へと向かう富士の瑞々しきを感じます。

②4 学校にも読める声のなつかしき身にしみとほる山里すぎて 『山桜の歌』

旅を重ねる牧水の人懐かしさが生んだ名歌です。辿ってきた長い山路は人生の時間でもあるのでしょうか。そこに子どもなつかしい声が響く。「山里すぎて」は、学校のある山里を過ぎたあと、しみじみとその声が蘇ってきたということかと思えます。

②5 ふくみたる酒のほひのおのづから独り 匂へるわが心かも 『黒松』

没後に出版された遺歌集『黒松』から。酒をうたった数ある歌の中でも忘れ難い一首です。酒が口中に匂うように、心もまた匂い立つ。下の句の「匂ふ」は美しく照り輝くという意味なのでしょう。ここでも酒と牧水が分かちがたく一体化しています。酔いをこんなに美しくうたった歌があるでしょうか。

②6 瀬の渦にひとつ棲むなり鮎の魚ふたつはすまずそのひとつ瀬に 『黒松』

有名な歌ではありませんが、これも味わい深い一首です。鮎は縄張り意識が強いので一つの瀬には一尾しかいない。幼少時によく鮎釣りをした牧水はそれを知っているのですね。それを歌にしただけのような内容ですが、この歌も何度も読み返すと、不思議と胸に迫ってきます。

②7 溪水に濁りぞ見ゆる山ざくら咲きなむと して雨のしげきに 『黒松』

山桜を詠んだ歌は、②0で触れた、歌集『山桜の歌』の一連が有名ですが、これも牧水の山桜への愛を感じさせる一首です。春光があふれる②0の歌と正反対ですね。雨で溪流は濁り、山桜もまだ咲いていません。でも開こうとする蕾をじっと見守る眼差しが伝わってきます。第三句の「山ざくら」は呼びかけに近い響きを持っているようです。

②8 動かねばおのづからなる濃き影の落ちてをるなり池の鮎の影 『黒松』

②9 庭の池の溢れつつありて静かなり部屋には蠅の三つ二つとび 『黒松』

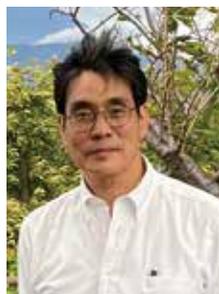
③0 をりをりに縁に散り込むす黄なる竹の葉ありて水無月の風 『黒松』

右の三首は牧水の最晩年、亡くなった昭和三年の作です。池の底にうつる鮎の影、部屋を飛ぶ蠅の羽音、風に吹かれて舞い込む竹の葉。命がただそこにある、そんな静けさです。牧水が

最後に到ったのはこのような境地でした。

「ゾーン」という言葉をキーワードに牧水の短歌を見ました。対象を愛し一体になると、この牧水の特異な才質が、比類ない短歌世界を切り拓いたのだと私は思います。ひろがえって各地で戦争が続き、閉塞感が重くのしかかってくる現代、彼が見た世界の美しさを、同じように美しく感得する心を私たちは持っているのでしょうか。詩人とは愛する者をいうのではありませんか。牧水の歌を読み返しながら考えているところです。

『筆者プロフィール』 おくだ ぼうよう



昭和四十二年京都市生まれ。早稲田大学第一文学部卒業後NHKに入局。担当番組の出演者だった佐佐木幸綱氏に出会い、

短歌結社「心の花」に入会、現在編集委員。平成十四年NHKを退職し、フリーランスのテレビディレクター、定時制高校の自立支援相談員などを務め、群馬県の少年院での短歌指導を続けている。相模女子大、早稲田大学講師。平成二十一年に第一歌集『亡羊』で現代歌人協会賞、平成三十年に第二歌集『男歌男』で第十六回前川佐美雄賞を受賞。令和三年に発表した第三歌集『花』で第二十七回若山牧水賞を受賞。令和五年十月一日に開催した第七十回「沼津牧水祭・短歌大会」の講師。

第三十四回

中学生短歌コンクール



第三十四回中

学生短歌コンクールには、沼津市内の全十九校から一四三八首の作品応募があった。どの作品も中学生らしい視点で日常を表現した作品の数々であった。選は沼津牧水会理事の永久保英敏、河本尚子、湯山昌樹、及び沼津牧水会会員の勝俣文子が行った結果、特選

十首、入選四十首が選ばれた。

特選十首は、令和五年十月十五日(日)に開催された第七十回「沼津牧水祭・碑前祭」にて表彰された。例年は、千本浜公園牧水歌碑前で行っているが、今回は雨天の予報により、沼津市若山牧水記念館で行った。

以下特選の作品を紹介する。

(河本尚子)

店先の風鈴の音夏を告げ並ぶ和菓子も衣替え済み 佐野生歩(金岡中)

和菓子屋の一風景を、絵を描くように切り取っていて、涼しげな初夏の風情を詠っている。

私の手かわしていった夏の蝶風の波へと飛び込んでゆく 長島礼央奈(暁秀中)

風の波へ飛びこむという、詩的な表現によって、一首全体が青春期の心模様を伝える比喻のように感じられる歌である。

アフリカに逃げ果せるとでも思ったか理科室逃走解剖ガエル 大胡田悠月(暁秀中)

理科室を逃げ出したカエルが、アフリカまで逃げるという大胆で若々しい発想に感心した。寝る前に聞こえてくるのは兄の歌風呂場

で始まる単独ライブ 加藤蒼(静浦中)

風呂場での兄の歌声を、毎晩聞かされているのだろう。楽しいな家族の雰囲気は伝わる。単独ライブというのが、面白い表現である。

焼きたてのパンのにおいのねこの手のふわふわのなかかかれる肉球 尾崎友海(第一中)

猫を抱きしめながら、肉球の匂いを嗅ぐ作者焼きたてのパンの匂いという表現に、猫の様子と猫への大好きな気持ちが感じられる。

一時間楽しいときとつらいとき時計の針は一定なのか 杉本大芽(第二中)

「時間」は一定なのだが、気持ちのあり方で長さが変わって感じられるものである。感性が豊かな中学生は、余計にその差が感じられるのであろう。

もんわりとよどむ熱気に窓あけてつうと流れる風の道筋 山崎飛鳥(金岡中)

「もんわり」とする中を、「つう」と流れる風」という表現が良い。まさに風の道筋が目に見えるように感じられる作品である。

いつまでも給食というたべものは清く正しい味なのだろう 山本大悟(第五中)

塩味や食材も計算されている給食を清く正しい味だと言っている。毎日食べる給食を、多少の皮肉も込めて詠んでいると感した。

熊本で海と花火とおばあちゃんおじいちゃん入院の夏 濱田倅太郎(愛鷹中)

熊本という具体的な地名や景色と登場人物を詠み込むことで夏休みの臨場感がでている。ただ、祖父の入院が心配で、心から満喫できなかったであろう。

木枯らしがすごい勢い吹き荒れる傾く夕日海に落ちるか 柿島魁(第三中)

夕日が海に落ちるか、心配になるぐらいの強風である。沼津らしい海と夕日のコラボの美しさを詠んでいる。

## 第二十八回若山牧水賞に 永田紅氏の歌集『いま二センチ』



(宮崎日日新聞社 提供)

第二十八回若山牧水賞は永田紅氏の第五歌集『いま二センチ』に決まった。選考委員は、佐佐木幸綱、高野公彦、栗木京子、伊藤一彦の四氏である。

永田紅氏は昭和五十年滋賀県生れ。京都大学大学院農学研究科博士課程修了。十二歳で「塔短歌会」に入会。平成九年に「風の昼」で第八回歌壇賞、同十三年に第一歌集『日輪』で第四十五回現代歌人協会賞、同二十五年に第三十一回京都府文化賞奨励賞を受賞している。両親は共に若山牧水賞を受賞した永田和宏氏、故河野裕子氏である。

受賞した歌集は、細胞生物学の研究者としてキャリアを積みながら妊娠と出産に向き合った三十代後半の日々を歌った四百八十八首を収録している。

永田氏は「父、母に続き賞をいただき、本当にありがたいです。父が受賞した時から、

四半世紀。世代が一つ巡り回ったことが感慨深く、様々な縁から宮崎や牧水がだんだんと近くなり親しみを感じていただけに、受賞はとてもうれしかった」と語った。

選考委員の各氏は以下のように評している。

佐佐木幸綱氏は、「科学者であるからか、普通の人とはちよつと違う豊かな独自性が良い。今回の他の候補作と比べてその点が圧倒的に優れており、とてもユニークだ。胎児を情だけでなく、科学の目を通して描いた。それだけで賞に十分値する」。高野公彦氏は「胎児が育つさまを科学的視点で歌っているのが特徴。一方で歳の差のある結婚相手との老後を考えると、寂しいという。それを、さらりと歌うところに魅力を感じた。一冊の中に豊かな世界を創り上げている」。栗木京子氏は「研究者としての多忙な日々もリアルに詠んでいて、育児を題材とした過去の牧水賞受賞作とも異なる新たな魅力を持っている。一瞬のかけがえのない気持ちを、言葉に留めないと消えてしまうという真心があり、さりげなく詠んでいるながら深い余韻を残している」。伊藤一彦氏は「非常に分かりやすいがそれでいて奥が深く、良い歌がそろっている。一見、何でもなく作られているように見えても細かいところ

に神経が行き届いており、新鮮で現代的な叙情がある。次の歌集が楽しみだ」。

授賞式は、令和六年二月一日(木)に宮崎市ゲーデンテラス宮崎で行われた。翌二日(金)には永田紅氏による受賞記念講演会が日向市中央公民館で行われた。

歌集『いま二センチ』からの自選十首を紹介する。

水道を流しつばなしの音ひびく研究室の  
夜更けは海につながる

母の歌の前庭にわれら日を浴びてまだ本  
当のさびしさを知らず

上澄みを生きているのはつまらないアメ  
ンボ飛び出すときの脚力

親指と人差し指のあいだにて「いま二セ  
ンチ」の空気を挟む

横向きに鏡に映す 身籠りし女たれもが  
見つめし形

眩しさは古びぬように切なさに紛れぬよ  
うに立葵咲く

病院を出でくれば秋 人なかに親子三人  
となりて入りゆく

細切れの時間のなかにものを書く干し草  
あつめて丸めるように

日の暮れは子供も不安になるものかタソ  
ガレーナちゃんと呼びて抱き上げ

草原にくさはらと打つルビのようにあな  
たの傍をやわらかくする